

一握の砂を火焔に食わせむ

殺さなければならぬと思つた。

私にはまだ遣らなければならぬことがあつたし、世界は私たちとの契約を破つて私を殺そうとした。だから、そうすることでしか私を生存させる方法が無かつた。死ねないから殺して生きた。 私たちに、そうさせないための契約だったのに、彼らがそれを一方的に反故にしたのだから仕方がない。これは緊急避難だ。

本来なら、態々リスクを負つてやるほど殺人にメリットは無いけれど、法が私の生存を認めないのだから、それを遵守することに意味は無い。守つても守らなくても私を殺そうとしているのだから、それはもはや直接的にも間接的にも私の生存に与しない呪縛でしかなく、不利益しか齎さないのだから切つてしまつた方が幾分マシだ。

私は公平さと、公正さと、欺瞞を持たないことを重視している。

失う財産も、守るべき家族も、大切な友人もいなくなつたから、自分で自分を律し続けなければ簡単に無法者に堕ちてしまふし、自己防衛のために正しさを主張するには、自らが

正しく在らなければ、発言に正当性を付与できず合理性を欠くと私は考える。故に、法が法を遵守し続ける限り、私が誰かを殺すことも罪を重ねることもなかった。

この世に私の居場所は無かった。

居るべき場所も無く、私は何処にも居たくなかった。

国は共同体を存続させるために在り、共同体の安全な社会運営のために法が在り、法は基本三権を保障するために個々人間で衝突する権利を制限し、基本三権を執行力を持って平等公平に保障するために行政が在り、法の良悪を裁定し濫用を防ぐために司法が在り、国民は基本三権を他者に侵害させず、個々人の幸福を追求する自由を保持するために、個々人間で衝突する権利を国に移譲している。故に。この社会契約が崩されたならば、自らの生命と権利を自らでもって確保・保持するために、あらゆる全ての努力が正当化されるのだ。

最初に、私から生存権を奪った奴らから、奪われたものを奪い返してやった。

彼らが社会の安寧の為にあった契約を反故にした必然の結果なのだから、私は何も悪く

ない。反故にされて契約が失効した時点で、裁く法も無いのだから罪も無い。

だから私は悪くない。

それでも、本当は態々殺したくはなかった。

だけど『不正を行うと不都合が生じる』と理解させなきゃ是正されることはないから、殺さなきゃならなかった。起きて然るべき不都合を社会に還元しなきゃならなかった。

だから私は悪くない。

…どうして。

約束さえ守られていたなら、私がこんなことをする必要は無かったのに…

約束を破った御前たちのせいで全員が大損害を被った。

地獄で死ぬまで死に続けて反省してくれ。

私はまだ生きなければならぬ。

たとえそれが、人を喰う鬼の有様であったとしても。

*

砂。砂。砂。見下ろせば、灰色の岩と砂しかない不毛の大地が地平線へと続き、見上げれば、夜でもないのに星々で飾り立てた漆黒の空が世界を包んでいる。他に見えるものといえば、大小様々の枯れ木のように生えている何かの結晶くらいなもの。

ここには私たち以外に生きている者はいない。それは文字通り一切の生命が存在しないということ、ここへ招かれたものは何も食べなくても死なず、呼吸さえ必要としなくなる。それがこの死と不死の不毛の世界。――月の宮。

私は以前から考えていたことがある。

聞くところによると、現実の神樹の根を隔てた先は天の神によって火の世界だということ。それなら、この世界ではどうか？ 試練の為に用意されたこの異界には天の神が居ないのだから、火の世界には成っていないはずで、ならば放火前の元の世界の姿が在るかということ、果たして、誰が立ち寄ることも無い壁の外まで再現のリソースを割く必要があるだろうか？と。

その答えがこれだ。理屈では分かっているけど、壁の中にいる限り本当にここが地球ではないことを理解することは無かっただろう……

私たちはここで、度重なる傷害事件に疲弊した人々が暴動を起こし、大赦の政治機能が瓦解するのを待っている。不安は爆発し、社会の混乱は騒乱を呼び、騒乱は疑心暗鬼を生み、不安と不満を肥大化させる。恐慌状態に陥った人々は、害意から心身を守ろうと他責的・他害的な思考に囚われるようになり、『自分はこんなに頑張ってるのに。我慢してるのに何故あいつらは』と、普段から税や法によって抑圧を掛け続けるものたちを憎み始める。

そうして統治者へのヘイトが十分に溜まった頃に、私たちが救い主として現れて世界を平定するのだ。たったそれだけのことで首を挿げ替えることができる。

こんなものは、単純な自作自演のマッチポンプでしかないが、正気を失い、正常な判断力を失った人々にはそれで充分。最大多数の単なる生活者である一般市民にとって、重要なのは統率者の経歴でも思想でもなければ、権謀術数を退ける正しさでも真実でもなく、今日の前にある苦境を解決しないしは解消し、苦痛から解放されることであり、その一点さえ達成されるのであれば、たとえ相手が悪魔だろうと、魔王だろうと、諸悪の根源であろうと人々は受け入れる。受け入れざるを得ない。

何故ならこれは神の意志によって起こされる革命であり、真実は神のみが知るところであり、神から人へ声を届ける伝令者である巫女たちも全て掌握されているからだ。たとえ手違いで情報が洩れることがあつたとしても、信用を失い、権威も失墜した元統治者たちの声に耳を傾けるものなどいない。

故に人類が神秘による災厄と、神秘による救世を結び付けることは叶わず、また、奇跡の様な確率で真実が露呈したとしても、救世によって齎される毒の蜜（不死）を一舐めさせてしまえば、もはや無かつたころには戻れない。

世界は私たちの掌の上にある。

*

月宮（がつくう／げつきゅう）の3階。見晴らしのいい石造りの部屋で、硬い椅子に座り、変化のない無音無味無臭の退屈な日々への不満をこぼしながら、白くて硬いテーブルに突っ伏し、人差し指で撫でつける少女と、その斜め向かいで巫女たちの報告をノートに纏めている少女が座っている。

「ふあ……あ暇やなあ。満天の星空も、もう見飽きてしもたわ……」

「そういえば、静さん。今日はもうお散歩は宜しいんですか？」

身体を起こして筋を伸ばし、グルグルと肩周りの筋肉を解しながら答える。

「分つとる癖に、ひなちゃんもいけずつやなあ。」

初見は『なんやこれ、デッツツツカ!! デカすぎやろw』て、中立神様式カガミ、ブネも有ることやしつ、テンション爆上げで探索し尽くしたろう思つとったんやけど『建物（たてもん）中だけで、約353キロある』とか聞いたらさすがにっ、なあ」

「フフッ♪ 四国の2割ほどの大きさだそうですし、私たちにはスケールが大きすぎて手に余りますよね」

「ホンマ、ホンマ。こんな山一つ作るみたいなん、誰が何のために作ったんや…建築士は一体なにモンなんやー！ っちゅーてな」

腕を目いっぱい拡げてエア・マウンテンを作ってみたり、身振り手振りで巨大な月宮殿を表現する度に、桐生静の白銀の髪が揺れてキラキラと美しく輝いている。

「巨大な神殿に対して調度品の類は人が使い易いサイズが揃えられていて、中立神様が利用していたとも思えませんし、もしかすると私たちのように招かれた方々が一文明築いて生活していたのかもしれないね」

「んー？ そんならここは不死の国やし、まだ誰か居るんちゃう？」

「確かに可能性はありますけど、そうなるよ……」

「『その月人達は何故居なくなってしまうたのか。一体何処に消えたのか。もしくは、何故姿を現さないのか』やな」

月宮殿内には争ったような形跡は無く、至って奇麗に整頓されており、この世界には大気が無いため埃は積もらず、生物が居ないため何も腐らず、ほぼ真空のため風化もほとんど進まない。つまり、何かが起こったのなら、その当時のままの状態が保存されているはずであり、考えられることとしては①神の手による強制退去。②自主的な放棄。そして③死角からこちらを監視している。の三つが挙げられる。

上里ひなたが、吹き抜けになっている窓から、果てなく拡がる砂漠を一望して思案を巡らせる。真空ということを見ても、月の昼間の気温は常温で水が沸騰し、夜になればマイナス170度という極限環境である。今日も、オゾン層を持たない漆黒の空より降り注ぐ凶悪な太陽光線から、不死の力が不変を代価にうら若い少女たちの肌を護っているが、先住者たちもそうだったとしたら……数分の沈黙の後、言葉の切り出す。

「…すみません、静さん。仕事をお願いできますか？」

「あちゃー、藪蛇やったか。こりゃあ、みんな集めて大規模調査やな。メツチャ大変やけど、ひなちゃんが言うならしやらないな」

「またそんな『本当はやりたくないけど、命令だから仕方なく仕事します』みたいなことを言って…四国に配置している巫女を作戦に支障の出ない範囲まで絞って、月の宮の探索に充てましょう」

上里ひなたがノートに挟んであった四国の地図と、月宮の全体図を広げる。

地図には風評の流布に都合の良い場所や、日時、勇者たちの搜索記録などが書き込まれている。

「でもエエんか、ひなちゃん。もう、そろそろやろ？」

「…この計画は、近く寿命を迎える既存の神樹信仰から月神信仰へ移し替えることです。

輝夜姫伝説の逸話に不死の霊薬が語られる様に、この世界でなら不老不死が実現されま
すから、如何に天の神がパーテックスを送り込もうと最早人類を滅ぼすことはできなくな
ります」

「まあ、中立神様自体が攻撃される恐れもあるわけやけど、その辺はなんか本人…本神？

が自信ありげやしな。『夜の世界に太陽が侵入することは容易ではない…』とか言うて」

「白夜という現象もありますけど、時期も場所も限定的ですし、基本的に太陽が出ていたらそれはもう夜ではありませんからね」

「はっ！ ウチ…気付いてもうたかもしれん…」

太陽は地上を照らし、地球は月食を起こして、月は日食を起こす三竦みやん…！

クッハー！ これもう勝てるんとかちゃう!?」

バンツと机を叩いて勢いよく立ち上がり、座っていた椅子が後ろに吹っ飛んだのも意に介さず、ひなたの元に駆け寄って「なあ！なあ！なあ！」と肩をテンポよく叩き続ける桐生静を、上里ひなたはにこやかに宥める。

「ぎ、気持ちは分かりますけど、落ち着いてください…っ静さん」

「あつ。すまんすまん、興奮し過ぎたわ」

「いえ、構いませんよ。そんなに目を輝かせる静さんを見るのも、久しぶりですし」

「まあなあ…… んで、どう？」

自分で言うのもなんやけど、結構いい線行つとる思うねんけど」

「そうですね… 確かに、日月の関係を考えると、中立神様は天の神に対してのアドバン

テージがあるように思います。パーテックスの侵攻に対しても『隕石を受け止めるのは慣れている』なんてかっこいいことも仰っていましたね」

「やんな！やんな！」

「ですが、月の輝きは太陽の反射ですし、天の神側は太陽神だけではないそうなので、そう簡単にもいかないのではないのでしょうか？」

「かーっ！せやっつた！せやっつたわ。」

まあ、話し戻すけど、そうやって時間稼ぎしとるうちに神樹様には休んでもろて、万全の体制が整ったら反撃開始。つちゅー話やったな」

「はい。」

中立神様に全てを捧げれば、誰も生まれない代わりに誰も死なない世界が訪れます。死なない代わりに生まれることがなくなりますが、誰も死ななくなると世代交代が起こらなくなるのですから、不滅の実現には必要なことなのでしょう……神樹様の寿命を考えれば、これが人類の取り得る最もベターな選択のはず……

…なのに、その前提の不滅が揺らぐようであっては、計画の根幹から崩れしまいます」

「ゆえに、最優先で確かめなアカンちゅーわけな。リョーカイしましたわ」

聞くべきことは全て聞いたと戸口へ歩いてゆく静を呼び止める。

「ところで：静さんは初めから全部解っていらつしやいましたよね？ 態々促すようにして私の口から言わせたのには、何か意図があるんですか？」

静は、いつものニヤケ面を崩すことなく答える。

「えええーくん？ 何のことー？ ウチそんな知りませんわー」

「もう：私が〃人事権を持っているから〃だというのは分かりますし構いませんが、普通に説明してくださいって良いんですよ？」

「（いや、ひなちゃんは人事どこの話ちゃうやろ）

知らん知らん。 そんなじゃ、行ってくるさかい四国の方は宜しゅうしてなー」

「宜しく願います」と上里ひなたが言い終わるのを待たずに、目の前にいた桐生静の姿がカガミブネによって消え失せる。それはシャボン玉が弾け、瞬く間もなく消えてしまふのと似ていて『ひよっとして、そこには初めから誰も居らず、白昼夢でも見ていたのではないか？』と錯覚しそうになる。頭では分かっているつもりでも、脳が『非現実的

だ』と認識してしまい現実の輪郭が朧気になってゆく……

最早彼女たちには、自らが立っているところが夢なのか現実なのかは分からないし、夢の様な勇者部の日々も、夢の様な天恐の地獄も、遙か遠くの夢物語のように思えて、月日の流れも自らの姿形さえも忘れてかけている。

彼女たちは、あらゆる意味で非日常に浸かり過ぎていた。

「…この世界では、死ぬことはありません……しかし……いえ」

『本当にこれで良かったのだろうか？』という迷いが生じる前に意識を切り替え、思考を仕事で塗り潰す。

四国に潜伏中の巫女たちに指示を出す司令塔がひなたであるが、当然ながら人の手の入った電子機器は連絡手段に使えないため、中立神が神託の形で中継している。これはつまり『通信の度に中立神に思考を覗かれる』ということであり、少しでも反抗の目が見られれば、他の多くの巫女たちのように自由意思を奪われかねないということ。

上里ひなたは、最も中立神に頭を覗かれる機会に見舞われる「司令塔」という立場にあ

りながら、並々ならぬ執着によって何とかこれまで自らの心中を秘匿し続けてきた。

『本当は今すぐにでも、苦しむ若葉の元に駆け戻りたい』

『若葉達を苦しめる中立神が憎らしい』

『誰にも相談できない。正気の巫女は既に居ないかもしれない』

『怖い』

『自分のこの行動が正しいのか分からない』

『洗脳下にある巫女たちを守るのは自分しかいないと言いながら、私が舵を取って被害を抑えなければと言いながら、私が巫女たちに手を汚させている』

『本当は、神に全てを奪われてしまうのを恐れているだけなのではないか？』

『本当は、自分の心中など初めから見透かされていて、こんな風に苦しんでも意味は無いのではないか？』等々の本心を無意識の泉に沈め続けて、万に一つも水面に浮上してしまわぬよう心を閉め殺す日々。

中立神が何を欲しているのかなど上里ひなたに考える余裕は無かった。

*

公園の砂場で小学生にも満たないであろう子供たちが、木の棒を突き立てた砂山の城を建造し、周囲に並べた小石を兵士や英雄に見立てて無邪気に戦争ごっこをしている。

一般兵たちは降り注ぐ破壊鎚に吹き飛ばされ、隕石に押し潰され、敵城へ斥候に向かわば捉えられ、長い長い永遠に続くが如し拷問を受けて、死なせてもらえぬまま砂山の下に埋められる。

英雄には特別な力が与えられていて、囚われ殺された仲間を思つて怒り、力に目覚め、志半ばで斃れたもの達の想いの力で無敵の存在となつた。英雄は巨大隕石を片手で受け止め、腕の一振りで敵城の一角を吹き飛ばす。

最早何物にも止められないかに思えた英雄だが、砂の下から起き上がるものが在つた。そう、激しい拷問の最中にて更なる苦痛を与えようと考えた王が、戯れに部下のマッドサイエンティストに禁術の実験台に使うことを命じ、不幸にも不死の怪物と成り果て、地下深くに埋葬された大親友の斥候である。

斥候は地下深くで遙かな時を過ごし、地獄に至りて魔神に魅入られ、そして、魔神の力を得た非業の悲しき怪物は地上を目指し、ついに光ある世界に舞い戻つたのだ。

しかし、怪物は既に永劫の時の中で言葉を失っており、親友の変わり果てた姿を見た英雄は『邪知暴虐の王の手に墮ち、意思無き生物兵器に改造されてしまったのだ』と猛りて、怪物に正義を振り下ろす。

『なぜ。どうしてだ。何故、御前が私を殺そうとするのだ』

『わたしだ！ わたしが判らないのか?!』

『なんだその力は。私が居ぬ間に何をされた！ 奴ら……！私の無二の友に何をしたんだ！』
怪物の嘆きは何者にも届かず、虚空に吸い込まれ消える。

英雄は義の為に親友と殺し合い。怪物は不条理で理不尽な世界を憎み、叫んだ。

気付けば敵城の在った地は、二人の死闘の余波で更地となっており、それでも無敵の英雄と不死の怪物の戦いが終わることは無い。

幾千年もの長きに渡り続いた怪物と英雄の戦いが、空高くから降りてきた不思議な音色によって唐突に終止符が打たれる。

世界を震わす、どこか寂しげで郷愁を思わせる切ない音色は人々の心に染み渡り、耳にした誰もがラグナロクの終焉を悟った。—— 〈トロイメライ〉だ。

世界に響き渡るその音色を合図に、城も、歴史も、人も、これまでの全てが神の手によってリセットされた。目の前には何者も消え失せた砂場が在るのみ。こうして魔王と勇者の戦いは神の戯れに繰り返されては掻き失せる。

それはまるで、誰の為でもなく何か意味があるわけでも無く、ただそういうモノだからと発生と消滅を繰り返すこの「園子ちゃん？」ちゅうのように……

「ひゃほへ……？」

……？

……あれ〜？芽吹先輩だ〜？」

今日の分の搜索を終えた白組は、帰路の道すがらに見つけた公園で休憩を取っていた。

「今度は何考えてたんだ、園子？」「ほけ〜？♪」

「…吐けっ！ほら、吐くんだっ！」

間延びした様子に悪戯心を起こした三ノ輪銀が、乃木園子の脇腹をくすぐって尋問を開始する。

「きゃーっ！ ミノさん、だめーっ！」

「ここかっ?! ここかっ?! ここだな!? このこのこのっ!」「ふっ! やっ、ひゃははっ!」

じゃれ合う二人の小学生を微笑ましく眺めて、楠芽吹たちは今後の方針を話し合う。

「やっぱよう、もうこの辺には居ねーんじゃねえか?」

「うーん。ここまで完璧に雲隠れし続けてるからねー」

「フッ。そろそろ、逃亡疲れから、ひよこりと尻尾を見せないとも限らないわ」

「数々の罪を重ねて、絶対に大赦から逃げ切りたい雀なら何処に隠れる?」

「それでやすねえ、お上の目から逃げるのは一苦労でえ…やすからねえ…つてサラッと人を犯罪者に仕立てた仮定の話を始めないでメブ?!」

「どうせ雀さんのことですから、政治資金献金等の容疑で追われてるに決まってますわ」

「…雀は追われる身の上だったのか…今まで気付いてやれなくて済まなかった…」

「冤罪だよ! 真に受けないで棗さん!」

「ええと…それで。雀さんなら、どう逃げますか?」

「ええー…大赦の監視から何週間も逃れ続けるなんて絶対無理だよ…：…下水通ろうにも専用の工具が必要だし、マンホール自体滅茶苦茶重いし、あからさまなところは直ぐマークされたし樋門閉鎖で袋のネズミだし、打ち棄てられた神社跡とかなら監視は届かないかもしれないけど、生存訓練受けないひなたさん達じゃバレない程度に生活環境を確保するとか無理だろうし、そもそも食糧の補給問題でどうしたって行き詰る。道じゃなく隣接する民家を襲撃しながら横断するルートは在り得なくはないけどそれなら目撃者も痕跡も残るし、見付かったら逃げ場無いから絶対しないけど、いっそ神官になりすまして大赦内の巫女さん部屋を転々とした方が可能性ありそうなレベル。いづれにしてもノーマークの協力者は必須だね」

「…加賀城から謎のすごみを感じんぜ」

(加賀城の逃亡者プロファイリングが本気すぎる…)

「協力者の存在…：…園子先生は、どのように推理しますか？」

「ん…：…：…z「園子さん…：？」…：チュン助の話聞いて思ったのは…まあ中立神が関わってるのでなければんだけど、大赦の目から逃れるには大赦自体をえんやこらー」

つてして、文字通り『大赦の目を盗む』のが一番確実なんじゃないかな〜ってこと。大赦は今、巫女の件で何処もてんでこ舞いだからね〜」

「…あつ！ 東大デモクラシーってやつだね、そのちゃん！」

「フツ。それを言うなら灯台下暗しよ、高嶋」「それだ！」

「灯台でも暗しく♪」「港に帰れませぬ〜♪」

「お先まつく〜らくらく♪」「君は誰〜？ 私はどこ〜？」

「灯台の意味！ そして『私はどこ』ってなに!? 怖い！」

「きつと、使われなくなった灯台のふもとで無くしてしまったんだな…」「何を!?!」

「赤嶺とは別の切り口から『大赦が怪しい』という同じ結論に至った…」

さ、話も纏まったことだし、そろそろ帰りましょうか」

「初めての集団下校！ 皆の者！ 地雷原と魔物の襲撃に気を付けろ〜！」

「いや昨日も一昨日も遣ったし、一人で突っ走るとまた迷子になるぞ、園子〜」

明後日の方向へ駆け出して10メートルほどしたところで、「キーン！」と口から効果音を上げながらUターンを決めて鷺尾須美にすがり付く。

「きゃっ?! も、もう、そのうち?」

「みんな一緒だから大丈夫だよ。ね? わっしー♪」

冷え切った心身に温もりが沁みて、一日ずっと強張った表情を見せていた須美の目元が緩む。

「そういえば、園子ちゃんはさっき何を考えていたの?」と芽吹。

「あ……実は、永久に続く魔王と勇者の戦いに、世の無常を憂いていたのですよ」

「……永久に続くことに無常を……?」

乾いた空に、勇者部員宛の一斉送信メールが飛んでゆく。

秋ももう随分と古くなり、空が夕日に染まったかと思えば、あつという間に夜がやってくる。勇者たちは冬の訪れを肌感じて身を寄せ合い、目の前の困難も『皆と一緒になら、きつとなんとかなる』と信じる。胸の奥底に眠る恐怖を忘れて前進する。

たとえ行く末が闇に閉ざされていようとも、振り返ってしまえば前に進めなくなるから。意を決して足を踏み出す。前へ。前へ。上へ。この坂を登り切れば、光があると信じて。必要とあらば自らの一部を切り捨てながら――

*

「退いてください勇者様！」「こん異常者共はアバラの二、三本へし折ってやらにゃならん！」「放せクソが！ ぎゃっ！」「背信者だ殺せ！」「お前ら全員殺してやる！」「うわ、血が服に着いた！」「こつち見んなクズw」「あ、あ、あ、あ！」「こいつまた武器を！」「脱がせ！」「全部脱がして晒しものにしろ！」「やめてください！」「はなせええええ!!」

切っ掛けは些細なことだった。

冷静にみれば『スマホを弄っていた女子高生と目が合った』というだけだったのに、その男性は『自分を盗撮して良からぬことに使うに違いない』と疑わず、私たちが悲鳴が上がった先へ目をやると、ゴツ。ゴツ。と硬く鈍い音がして、顔を赤く濡らした女子高生が男性に首を掴まれてぐったりしている。

脱力した女子高生を乱雑に地面に放った彼の息は荒く、被害者の頭で打ち据えられた壁には日の丸が浮かび、涙のように垂れる鮮烈な血痕と、それに対比するように白んだ人々の顔が忘れられない。鉄筋コンクリートの灰色の壁に現れた血走った瞳が網膜に焼き付いて、今も視界の端には血だまりに横たわる女の姿が視える。

あの場に居合わせた誰もが、きっと同じことを思った。

『ああ…ついに起こってしまった』と――

「友奈危ない！」

背後から鈍を振り下ろされ、精霊がそれを弾く。

「勇者!? 大赦!? ふざけるな!!」

私たちはお前らの餌じゃない!家畜じゃない!

私たちは私たちの手で、お前たちバケモノ共から人類の尊厳を取り戻す!

レジスタンスに扇動された鉄砲玉たちが、各々の手に正義と勇気の具象を握りしめてい
る。

「つとに、もう! こっちが手を出せないのを良いことに…! あんた達、好き放題言っ
てんじゃないわよ!!」「夏凜!」「分ってるわよ!」

大赦本庁は山の頂に座し、山をぐるりと囲むように張られたフェンスを背にして神樹派
と勇者たちが防衛に当たっている。しかし、ただの人間相手に勇者たちでは戦力過剰で、
だからといって勇者の力を使わなければ女子中学生の体躯では手が出せず、レジスタンス

と神樹派の人々が鏑迫り合う一角では、暴力を振るい振るわれ、敵が動きを止めるまで増大し続ける恐怖と脳内麻薬により歯止めが利かなくなっている。

大赦のメッキが剥がれ落ち、不安を突き付けられた人々は三つの選択を迫られた。

ひとつは、レジスタンスへの加入。

ひとつは、かつての天恐発症者たちのように夢の世界へ籠城すること。

そして、レジスタンスに付くことも逃避に走ることもできなかつた人々は、自らで思考することを放棄し、自由意思も行動も責任も未来も、すべてを信仰という形で神樹に押し付けた。それが彼ら神樹派だ。

「風!」「樹、いける!」「ごめんなさいっ!」

夏凜がレジスタンスの武器を破壊もしくは奪い、短い言葉とアイコンタクトだけで意図を伝えたえ、瞬時に樹がワイヤーで一網打尽にする。

「くそっ!俺たちは諦めない! ぐあっ?!」

神樹派の男が、拘束されて抵抗できないレジスタンスの鳩尾を蹴り上げた。

「ははっ!この身の程知らずの罰当たりどもめ!」

風は心配そうに見つめる妹の視線を感じながら、捕縛したレジスタンスたちに歩み寄り、その場の全員に聞こえるようにドスを利かせて名乗りを上げる。

「私は勇者部部长、犬吠埼風！」

私たち勇者に文句があるなら一番最初に私を狙いなさい！

それと…

私の大切な妹や部員に傷の一つでも付けてみる!!

私が壁の外だろうが地獄の果てだろうが追いかけて、バーテックスに襲われた方がマシだったと思えるような恐ろしい目に合わせてやる!!」

身の丈を越える大剣を片手で振るい大地を割き、風の真に迫る声圧に神樹派とレジスタンスの大人たちが竦み上がる。

「あなた達レジスタンスの目的は何!？」

巫女素養者と思われる少女が、風の気迫に負けじと言葉を返す。

「私達の目的は、お前たちバケモノ共を撃滅し、人類の主権と尊厳を取り戻すことだ！

たとえ私の命がここまでだとしても、必ず仲間の誰かが、お前たちの喉笛を咬み切って

みせる！

お前たちの悪逆非道が白日の下となった今、安眠できる日は二度と来ないと思え!!」

ブツンと弾力のある何かが切れる音がして

「わたアレイたちの、つうみいい？だ あ ア あ?!」

「ひえあっ?!」と、レジスタンスの男が情けない悲鳴を上げた。

「お姉ちゃん落ち着いて…!」

「き気持ちちは分かるけど手を出しちゃダメよ死んじやうから?!」「言うに事欠いて私達を罪

人呼ばわりしよるか貴様あああ! 許 さ ん! 潰す! レジスタンス潰す! カチコミじ

やあああ!」「ちよっとお?!」「お姉ちゃん?!」「ハッ!人の形をしても所詮バケモノ。

理解できる頭なんか無かったか!」「あんたもこれ以上煽るなあああ!そして友奈も抑える

の手伝えええ！」「え。あ。ごめん夏凜ちゃん、わたしぼーっとしてた……！」

勇者たちが戯れていると、音も無く突然レジスタンスを挟んだ正面に人が現れる。

「姉様！」「……失礼致します」

「あつ、あんた巫女ね?! 逃がすかあああ！」

夏凜が捕らえに掛かるが、どんなに勇者が機敏でも瞬きより早くは動けない。

巫女素養者に姉様と呼ばれた人物は捕縛されたレジスタンスに手を触れると、彼ら諸共忽然と消え失せる。

「畜生つ逃げられた！」「逃げてなどおりませんよ。三好様」「なっ?!」

「月鏡。鏡花水月。猿猴月を取る。」

——地を這う貴女方から、どうして逃げる必要がありますでしょう」

月の巫女は勇者たちの背後。フェンスの向こう側の森に立っていた。

油断なく夏凜が双剣を構える。

「何するつもり！ 内容によってはただじゃ置かないわよ！」

「私どもは何も致しません。」

ただ照魔鏡・雲外鏡と伝えられる様に、鏡は虚像を生むものであると同時に、偽りを暴

き、真実を現すものでもあります。同じく私たちは人と世界を映し出し、人類に思考の機会を与えているに過ぎません」

「わけ分らないこと、言ってるんじゃないわ、よっ！」

「無駄なことっ…?!」

夏凜がフェンスを飛び越え、再度取り付きにかけり容易く躲わされる。しかし彼女は、どうせ逃げられるという油断と、夏凜との会話に気を取られていたのが災いし、静かに這い寄り、得物を捕食せんと待ち構えていた数多のワイヤーに気が付けなかった。

「あっ！」

夏凜のミスデイレクションと、樹のワイヤーの連携でフェンスに磔にされ、友奈が秘孔を突いて行動不能にする。如何にカガミブネで瞬きより早く移動できようと、使うものは所詮ヒト。不意を突いて抵抗の意思を奪ってしまえば捕獲は可能だ。

「…あの。ごめんなさい。」

お姉さんは…ヒナちゃんたちは、町の人たちに何をさせようとしているんですか…？」

風のスマホに着信が入る。

「なっ!? 友奈はその人を連れて先に戻って！」

「どうしたの、お姉ちゃん!？」

月の巫女の手引きによって、すでに多数のレジスタンスが山の中腹まで侵入しており、ある程度敵が纏まっている今のうちに捕縛せよという通達だった。

「なんですって!？」

さらに悪いことに、市街地でも民間人を巻き込んだレジスタンスとの攻防が始まっており、本庁の防衛に割ける勇者が限られてしまっているという。

「行くわよ、樹! 夏凜!」「まって風せんぱ……!」

通達には『死なない程度であれば、手段は問わない』という但し書きが添えられており、事態の緊急性が伺えた。

「行っちゃった……!」

薄暗い森の中。聞こえてくるのは木の葉のざわめきばかりで、先ほどまで温まっていた身体の熱は成りを潜め、今では肌寒ささえ感じている。

冷たく湿気た腐葉土の匂いが友奈の肺を満たす。

腰を抜かした巫女を運ぶため勇者に変身し、いつもの様に勝手に出てきた牛鬼が人懐こく頬ずりをしてくる。

「……うん！ありがとうございます、牛鬼。一緒だもんね。」

……よし！急いで皆に合流しなくっちゃ！よいしょ！……あ、こっちじゃダメだ」
負ぶって運ぼうと思っただが脱力のツボを押してしまっていて、巫女が上手く掴まること
ができず落下の危険があったため、お姫様抱っこに持ち替える。

「行くぞー！」

牛鬼に触れていた首筋と、撫でた手のひらが少しだけ温かかった。

*

山を下り、屋根伝いに跳んで移動する。

眼下には人同士が殴り合い、店の窓は割られ、車からは火の手が上がり、八方から悲鳴
が聞こえ続ける地獄が広がっていた。山の木々に遮られ、知らずに済んでいた火の海を
前にして友奈の顔に悲愴が浮かぶ。

初めに遭遇した5〜6人程度は救助できたが、身動きの取れない巫女が襲われかけたた

め、罪悪感に心臓を摺り潰されながら人々の悲鳴を無視して走る。

状況的に、もはや個人の力では如何にもならないのだから罪悪感を感じる必要など無いのに、友奈には割り切ることができない。『どんな状況でも、きつとなんとかなる』は

『どんな状況でも、きつとなんとかできたはずだ』に転じ、責任感という重く硬い石臼を用いて、強大な心の鬼に身を責め続けられることになる。

「はあっ…はあっ…レンちゃん！ お願い！」

捕獲した巫女の意識を封じるため拠点に控えていた弥勒蓮華に、鏡の巫女の引き渡しを終え。現場に戻ろうと駆け出したところで神奈に引き止められる。

「結城ちゃん。大変だったみたいだね」

「神奈ちゃん、どうしよう…！ 洗脳されていない人たち同士で争いが始まっちゃった…！」

公民館のお爺ちゃんも、八百屋のおばさんも、皆おかしくなっちゃった！ どうしよう神奈ちゃん…っ！」

諍いを忌避する友奈は居ても立ってもいられず、明らかに狼狽していた。

「違うよ、結城ちゃん。」

みんなルール無用の自然体に戻っただけで、誰もおかしくなんてなってないよ」

「おかしいよ！　だって…だって本当はみんな優しい普通の人たちなんだよ!?　殺すとか、そんなこと絶対言わない人たちなんだよ!?　なのに、こんなの絶対おかしいよ！」

淡々と『これは疑問を挟む余地など無い、ごく当たり前で自然な成り行きなんだ。これが心を剥き出しにした人間の姿で、これが現実なんだ』と錯乱する友奈を論ず。

「人はルールの下で公平に権利が保障されていたから仲良くできていただけで、それを失えば、もう自分で自分を守るしかなくなつて『万人の万人に対する戦い』が始まつてしまふ。だから大赦の政治機能が崩壊した時点で、こうなることは必定だったんだよ」

神として友奈に問い続ける。

「さっきのおじさんも、巫女さんも、そうすることが正しいと思つて行動してただけ。

結城ちゃんも『勇者として正しい行い』だと思つて、沢山のバーテックスを殺してきたじゃない？　バーテックスだって一応生きてるのに」

「なにを……言ってるの神奈ちゃん……？」

「それとも。ただ単に友奈にとつて姿形が普通じゃなかったり、言葉が通じなければ殺しても良いってだけなのかな？ たしかに、敵は理解できない言葉も通じない、自分たちとは違う。バケモノ。だと思えば暴力の敷居は下がるよね。そういうこと？」

「それは、そんな、違う、だって、バーテックスは倒さないと……みんな死ん「じゃあ、あの人たちと同じだね？」ちがう……！」「自分を殺そうとする相手なら殺してもいいってことでしょ？ なら、さっきの子は殺されても良かったんじゃない？」違う！違う！違う！違う！違う！違う！「違う！違う！」「違わない」違う！違う！そんなの間違って「結城ちゃんが言ったのは、そういうことだよ」どうしてそんなこと言うの高嶋ちゃん……?! !

（……ちがう……）……高嶋ちゃんは、神奈ちゃんは、そんなこと言わない……誰……

あなたは、誰……？」

「んぐっ?!?!?!?!?!」

突然唇を奪われ、冷たく苦い義体の舌が強引に捻じ込まれる。

「(なに?!なに?!なに?!なに?!こわい!!こわい!!こわい!!怖い!!!) いやっ!!」

思いきり突き飛ばした反動で友奈は倒れ込み、咄嗟に出口へ目を向ける。そこには神奈との当たり稽古中に腕や首が取れて動かなくなったはずの義体たちが、逃げ道を奪うように起き上がり、こちらを見ていた。

「それだよ、友奈ちゃん。みんな自分の領域を犯されたくないから、正気で人を殺そうとしているんだよ」

不気味を体現した義体たちが、ゆらり、ゆらりと、しかし真っ直ぐ友奈を目指して歩き出す。命の無い生き物が、わたしを捕まえようと恐ろしく白い腕を伸ばしてくる。

「だ(れか)!! (みんな!)?! 声が…あれ? ひっ」

起き上がった義体たちから逃れるように体勢を崩したまま後退していると、手に冷たいものが当たり、被さる様に神奈だと思っていたものに抱かれる。自身の正しさに迷いが生じ動揺して勇者システムが起動しない。完全に囲まれてしまった。もう逃げられない。

「これは『友奈』が答えなきやいけない」

(助けて東郷さん……!)

*

「ひいっ?! 助けてくれ! 誰か!」

まだ時刻を示す短針が頂点に至らない頃。

バケモノに怯えて暗黒の山中を逃げ惑う哀れな人々が居た。

「何故逃げる人間」

「バケモノを殺しに来たのだろう? 人間」

「来るなあっ?!」

「暗愚で粗末な人間よ」

「食いて食われる世界を忘れし人間よ」

「驕り高き人間よ」

「食い殺される覚悟も無く死地に立ち入った愚か者よ」

「何故逃げる?」

「決意無き、意志を持たぬ人間よ」

「足ることを学ばぬ人間よ」

「矮小で醜き人間よ」

「何故ここに来た?」

「死にたくない！死にたくないっ……………」

またひとつ、物言わぬ肉の塊が誕生した。

「こちら薄鬼43。レジスタンスと目される男を三名確保。これより留置所へ移送する。
薄鬼34、40、44は、引き続き侵入者の追跡を行う」

(何よ、あれ…)

郡千景が大赦に指示されたポイントへ急行すると、そこには12人もの白装束の鬼が、男達にトラウマを深く刻みつけながら追い回しているという異質な光景があった。

「来たか」

「あなた達は、誰… いえ…そもそも人間なのかしら…？」

鬼たちに気取られ、姿を晒す。

バーテックスに対峙するのは異なる、えも言われぬプレッシャーを覚えて、千景が構える大鎌に冷や汗が滑る。姿は見知った人の形をしているのに、獲物に集る悪夢のような姿からはむしろ星屑や魔物を思わせた。

「：聞こえなかったかしら？ あなた達は『何』？」

「はっはっは。しばらく見ないうちに忘れてしまったかね」

やれやれまあまあ仕方ないといったポーズを取り、その鬼たちは答える。

「私たちは私だよ」

「私たちは私だよ」

「私たちは私だよ」

「私たちは私だよ」

「私たちは私だよ」

「私たちは私だよ」

「私たちは私だよ」

「私たちは私だよ」

「私たちは私だよ」

「私たちは私だよ」

「私たちは私だよ」

「私たちは私だよ」

『私とは即ち私である』氏紙楓だよ」

「なんてこと……」

命無き砂の哀しさよ　さらさらと　握れば指の間より落つ。